



TITLE:

伯林だより(ペンク教授の[近]況)

AUTHOR(S):

寺田, 貞次

CITATION:

寺田, 貞次. 伯林だより(ペンク教授の[近]況). 地球 1925, 4(2): 149-153

ISSUE DATE:

1925-08-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182982>

RIGHT:

伯林だより

(ペンク教授の近況)

寺田貞次

私は英國の滞在を終へ、去四月初旬獨逸國に轉學、伯林大學でペンク先生(Prof. Dr. Albrecht Penck)の御指導を受ける事になりました、エジンバラで御厄介になつたチズム先生(Georg Cuschum)に紹介を御願ひすると、ペンク教授は既に退隱して居られるから、目下 Meereskunde の主任たる Reih 教授に紹介してあげよう云ふ事で、其の紹介狀を得て参りました、伯林に着すと直ぐ海洋博物館 Meereskunde Museum 内樓上の地理學教室(Geographisches Institut der Universität)を訪ひましたが、尙休暇中で各教授は出勤して居られない、然しバツシン(E. Busch)と云ふ教授が居られたので面會すると、Reih 教授は和蘭旅行中であり、ペンク教授はストガートに居られる、二十日過でないさ御歸りが無い、講義は月末か、來月初からであるとの事であつた、已を得ず聴講の手續だけしました。

二十日過再伯林大學に到り揭示場を見ると、ペンク教授の講義は來る三十日から開講、毎週火曜と金曜の午前十時から十二時迄が談話時間(Sprechstunde)と揭示が出て居た、夫で二十

伯林だより

八日の火曜に教室を訪れて見たがペンク教授は尙御來校なかつた、然し Reih 教授は既に歸つて居られたので、紹介狀を出して面會を求める、チズム先生から既に直接書面で依頼して置て下さつたので、小生の來る事は既に知れて居り、好都合であつた、チズム先生の御懇切には今更ながら感謝せざるを得ない。揭示通りペンク教授の講義は明後日から初まるさ知つたので、三十日朝少し早く教室に行き、待つて居るさ、丁度九時にペンク教授來校、兼ねて依頼して置た助手の案内で、教授の研究室で面會し既に講義時間が迫つて居たから、ほんの御挨拶だけ申上げるさ先生懇切に話され、日本人では中日、山崎、夫から神戸の、仙臺の、諸氏を知つて居る云々云ふて居られ、早速同道教室に至り聴講する。

教授の講義は一週四時間(月・火・木・金、毎朝九時から十時迄)で Übungen が六時間あります、然し Übungen の方は Prof. Dr. Buschling, Dr. Brandt 並に Dr. Hans Meyer 諸氏が分擔して居られます、教授の講義は此の學期は Deutsches Land und Volk

(Mittel- und Norddeutschland) を云ふ題であります、教授は先年日本に來られた事があり、京都にも立ち寄られ、京都大學法科講堂(西側の教室)で一場の講演をせられた、自分は當時文科大學の學生であつたので拜聴する事が出来た、山崎、小川諸博士等の案内で入場せられ、歐洲の氷河(Glacier)に付て諳ぜられた、あの黑板に四回氷河が襲來したとて、之を圖解されたのを記憶して居ます、當時の記憶に依る教授は、丈の高い眼光の鋭い、丁度山川博士の様な方だと思つて居た、今までのあたり御面會し、記憶のあながち間違でない事を悟つたが、あの時よりも稍々肥滿に失して居られる様な感じがした、所謂獨逸式の太鼓腹を突き出して、モーニング姿で、左右の地圖を靜かに指しながらか譯ぜられる様子は誠に奇觀である、然し眼光紙背に徹する處其處に笑みを含んで、一種の優しきをもつて居られる處は、田村將軍の古を追懷せしめます、矢張り地形論を主として、黑板上に圖示される處は、京大の黑板上に書かれたと同筆法で、過日ラインの下流地方を論ぜられ、其の獨逸工業の基礎地であつて最重要地帯である事を説き、將來再獨逸工業の回復する機あるべしと力説して居られました、ライン沿岸の問題は矢張り獨逸の死活問題であるだけに、此の方面の論究は各方面にあらはれベント教授の他、本學期の講義中では、歴史家の Dietrich Schäfer 教授も、Der Rhein, Deutschland und Frankreich を云ふ題で、すべての聽講生に公開で一週一時(木曜午後六時より七時迄)間づ、講じて居られます。

次の日には聽講表に御署名を仰ぐ要があつたので、又ベント

先生を其の御室に訪ふた、序に先生御來京の節、京都帝國大學で一場の御講演のあつた事を記憶して居る事並に當時自分は地理學科の學生であり、先生の御講演を拜聴した事、其御話は歐洲の氷河に付てゐつた事等を御話すると、教授も當時を追懷せられて、日本へは一千九百何年に參つた、日本では非常に御配慮に預つた、山崎其の他諸氏に宜しく傳へてくれとの傳言でありました、教授却々快活、日本滞在中の御土産に、日本語をだいぶん覚えて來られたものと見え、御署名の際には Bonzen (萬歳を考ふ)と附記せられ、其の後も時々日本語を、例へば「今日は」さか、又過日 Excursion の際には「鳥居」など話されて居ました。英國では既に隱退されて居る様に聞いたが、未だそんな様子はなく、geographisches Institut の Director として活動して居られ、經こそない様だが、頭髮も尙夫れ程禿げて居らず、眼鏡の如きも時々鼻眼鏡をかけられる程度で、却々の御元氣であります。過る日曜(十七日)には學生引卒、附近の Götterwald, Havel 方面に Excursion を試みられました、小生も御伴しました。

朝八時半市の西南郊なる Nollens See 驛で教授一行に會する、教授は粗いスコッチの洋服を着し、上着の上には塵除代りに白褐色亞麻製の夏服上着をおほひ、古びた中折帽子、古い靴と全く旅行姿で、ポケットに數葉の折地圖を準備して居られ、學生は男女合せて十數名であつたが、何れも旅装、不思議に帽子をかぶつて居ない、ニロラセー驛は Götterwald の南端 Havel の一部なる Wann See 時に在り、水泳場でもあり、古都 Potsdam

行の湖上汽船の發着點でもあり、今日は快晴、日曜さ來たものだから、散策の客殊に夥しい、教授毫も頓着なく、驛前に準備の地圖を擴げて、今日の Excursion の大要を説明せられ、驛の東北裏なる Schiachen-See と云ふ小湖畔で其の成因を説かれ、(Glaciale Ustronomie) 現今地形の變遷を示し、鐵道下を過ぎ Grinevald の南端なる、松林を横切り Want-See 畔に出る、小生に島居云々と語されたのは此處で、綠濃き松林中に眞直に走る一條の通路の入口に當て居る、島居と云はれるからには其の奥に何かなければならぬと思て居る、其の突當り崖上に日本式神社風の靈葬の建物が在つた、却々御考のよいのに一興した崖下は水泳場で、早くも遊泳の客で充ちて居る、一條の通路で連結して居る湖中のの小島では、Water Tower の立て居る、丘陵の土取場で Glacialschichten に付て説かれる、時既に十時、教授はポケットからサンドイツチを取り出し、食ひながらトン／＼先に立つて進まれる、學生も之に倣つて夫々携帶のサンドイツチをかちる、獨逸の風習と見えて一向平氣である、湖岸は水波の作用で出来た Cliff を成して居る、教授は其處に生育して居る、樹幹を指し、樹種に依り樹幹と斜面との角度を異にする點を注意せられ、(松樹は斜面に關せず地平に眞直に生育し樺樹などは斜面に従て眞直に生育する) 急岸を攀攀と登つては崖上に立つて、其の成因を説明され、所々崩壞地に付ても注意せられ、再崖を下り、湖岸の賑ひをもとせず、地圖を擴げて説明があり、其處に在る鐵管を發見しては水道との關係を説き聞かされ、渚の砂中 (Dünensand) に貝殻の含まれて居るのを

伯林だより

拾ひあげて、其の Paludina uliviana や Unio Weichsel Warthe Kanal より移棲したものである事などを教へられ、自分は參考の爲め此の砂など採集して居る中、教授の健脚なる處に行つてしまはれる、再び急崖を攀ち一細流岸に出て、岸下を見下しつゝ、谷の成立を説明される、豁谷の説明には適切な場所、其の Oed から Youngs 説かれて居た、砂塵を犯して湖岸に下り、再び斜面を登り、三角測量の基石を發見しては、此の石の何なるかを學生に質問しつゝ、説明される最後に見はらしのよい場所に出て、全體の地形に付て説明があり、之れで Excursion を終り、松林中を横斷し、再びニコラスセー驛に引かへし解散した。

此の Excursion は範圍こそ廣くはないけれども、丘陵と湖岸とを何回も登つたり下つたりするので、意外に疲勞した、夫にも係はらず、教授は終始先導になつてトン／＼と進まれ、其の健脚なる、うかざして居るを後れてしまふと云ふ速力であり、天氣よく温暖で随分汗をたらして居るゝに係はらず、一度の休憩をさへ取られない、午前のサンドイツチの如きも歩きながら食べると云ふ有様、細流の處で腰を下るされたから、一同休憩かと思つて腰を下るすと、休憩處でなく豁谷を見下して説明をするに都合がよいからであり、又最後の見はらしのよい處に休まれたから、今度こそ休憩かと學生達教授の後の木陰に腰を下すと、そんな陸に引込んではいかないとて日光の照りつける處に出でしめ、又學生が少しくれて来る者があるを疲勞したのかと笑つて居られる、又湖岸 Cliff に沿ふた道を、先生を中心に學生一團となつて歩いて居る、如何なる拍子であつたか後

から二三名の自轉車乗がベルをならさず、突然園中に突入り一學生と衝突した、丁度教授のそばであつたので、一同驚いた、教授憤怒、早速自轉車を取りあげ大聲でどなりつけられた、小柄な自轉車主恐縮して居るさ、後から友人がかげつけ漸く許さるゝを得た、其の元氣な事、壯者も及ばない勢で、其のトン／＼と終始先に立つて歩まるゝ處、時にどなりつけらるゝ處等誠に某先生を彷彿せしめ、此の調子で獨逸を始めアルプスなり諸方を調査研究されたのだからと思ふさ、思ひ半に過ぐるものがありました。

かく申す教授は歸途には松林中に愛らしく咲いて居る、赤いのか又は黄色い草花を自ら摘んで宅への土産に持ち歸られました。

た、定めし今日の物語に先生の机を飾つた事でありませう、其の武骨な處に風雅の趣味を有して居らるゝ點は、又何さなくおくゆかしき感にうたれました。ヘンク先生の昨今は右の様で翌朝からは疲労もなく講義をつづけて居られます、御安神を願ひます、尙來る七月一日から約一週間は獨逸國の地理 (Geography) 日で、Breit に會合する事になつて居ます、ヘンク教授も出席講演されるはずで、小生も是非聽講致し度いと思て居ますから、此等に付きましては又御通報申す機會があらうと存じます。

お断り 正誤

第四卷第一號(前號)

- 一、第二十六頁七行目、上夜久野驛より以下十一行目ものらしい迄の五行を第二十五頁終より二行目に入れる
- 二、第二十六頁七行目、略南三十度より直ちに十二行目西へつゞく